

# 混乱乗り越え建国100年

ブカレスト日本人学校長

清水 哲也さん

＝三条市出身＝



「白い妖精」コマネチが記憶にある世代はたいぶ限られてきました。初めの10点満点や3個の金メダルは観衆を魅了し、ピートたけしのポーズも流行しました。

そのコマネチを生んだルーマニアの首都ブカレストは、日本最北端と同じ北緯45度にあり四季がはっきりしています。夏は35度を超えるものの湿気がないため、日陰に入ればそれほど暑さを感じません。冬の寒さは厳しくマイナス20度近くになりませんが、温水全館暖房のおかげで家の中は快適です。

「サマータイム」というと私はマイルス・デイビスを思い浮かべるのですが、EU諸国で導

入されている「夏時間」のおかげで夜9時過ぎまで明るく、白夜のような不思議な感覚をもたらします。

ルーマニアが建国100年となった昨年、ブカレスト日本人学校は創立40年を迎えました。児童生徒13人、文科省派遣教員5人、現地スタッフ1人という構成で、一人一人の個性を把握した柔軟な教育課程を組んでいます。日本人としての礼節やマナー、高い言語能力を身に付け、広い視野に立って物事をとらえるグローバルな人材の育成を目指しています。

独裁・腐敗・抑圧の象徴であり国民を困窮させたチャウシェスク政権が崩壊して30年。かつて「東欧のパリ」と呼ばれた優雅な街並みは、当時の政策により無機質な建造物に変わってしまいました。

日本人学校は激動のルーマニアを見つめながら混乱の時代を共に歩んできました。今日までの苦勞をしのび、これからも着実に歴史を刻んでいきたいと考えています。

（清水さんは1958年生まれ。2018年3月三条市立大崎中学校を退職し、同年4月からシニア派遣としてブカレスト日本人学校に勤務しています）



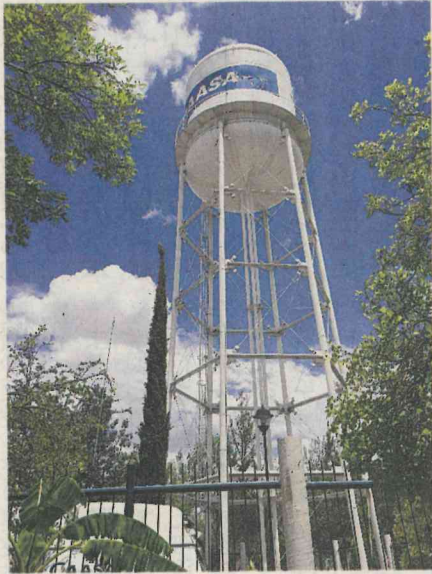
ルーマニアの中央を走るカルパチア山脈でのスキー授業

# みな仲間学んだ寛容さ

元アグアスカリエンテス日本人学校勤務

小沢 邦夫さん

＝燕市出身＝



先日、国際ユースサッカーい  
n新潟に参加していたメキシコ  
ユース代表の応援に行きまし  
た。日本の子どもたちに笑顔で  
対応したり、熱くサッカーにつ  
いて教えてくれたりする「メヒ  
コ」の人たちに、さすがアミー  
ゴの国：とうれしくなりまし  
た。

3年間、メキシコで家族5人  
で生活しました。メヒコの人々  
の良さは「寛容さ」です。先住  
民やスペインの文化を色濃く残  
しつつ、米国で流行しているも  
の、日本の食やアニメ文化など、  
多様な文化を受け入れて共存  
し、発展しているのがメキシコ  
です。

人々は陽気に「どこから来た  
？」「日本の家族は元気か？」  
と声をかけてくれます。知り合  
いになれば「君も家族だ」と、  
ホームパーティーに招待してく  
れ、そこに行けば、みんなアミ  
ーゴになります。帰国の際は「い

つ戻ってくるんだ？私の家は君  
の家だよ。その優しさは、日  
本でも学びたい精神です。

メキシコ生活を彩ってくれた  
のが豊かな食文化です。おなじ  
みのタコスにはスパイシーで色ど  
りどりのサルサ（ソース）や搾  
ったライム、サボテンのあえ物  
やワカモレー（アボカドのペー  
スト）などと一緒に食べます。  
主食のトルティージャはチーズ  
を入れて焼いてもよし、具を入  
れて揚げてもよしで豊富なバリ  
ーエーションです。

高地のアグアスカリエンテス  
には川がありません。ここでは  
地下何百メートルの地下水をくみ上  
げ、生活用水として利用してい  
ます。専用工場でそれをろ過し、  
消毒殺菌したものをボトルに入  
れ、飲み水にしています。子ど  
もたちはこれらの施設を見学、  
そこに住む人々の知恵や努力に  
ついて理解を深めました。生活  
の中で目にしているものが自分  
ごととして捉えられるようにな  
る。それこそがグローバルな人  
材を育てる上で大切にしていき  
たい視点だと考えています。

（小沢さんは1979年生ま  
れ。アグアスカリエンテス日本  
人学校に2017年度まで3年  
間勤務。現在は燕市立燕東小学  
校に勤務しています）

街の至る所にある地下水くみ  
上げタンク施設

カラチ日本人学校勤務

小林 厚司<sup>あつし</sup>さん

＝燕市出身＝

おいしい果物所狭しと



パキスタンの屋台で果物を売る人にインタビューする児童。とてもきれいに並べて売っているので驚きます



パキスタンと聞くと、怖い、大や道端の屋台を飾ります。バナ  
変、分らないなど、あまりいいナ、ピーチ、グレープ、パイ  
ことを思い浮かべない人もいるとア、すもも、オレンジ、イチゴ、  
思います。でも、親日家で子ども好きの人が多く、会えばすぐに写  
真撮影会。困っている人を見るとすぐに声を掛ける。そんなフレ  
ンドリーなパキスタンの人たちを、ぜひ日本人に知ってほしいと思  
います。

この国は、新潟と似ているところがあるんです。実はパキスタンもフルーツ天国。時季になるとおいしい果物が所狭しとスーパー  
この国は、新潟と似ているところがあるんです。実はパキスタンもフルーツ天国。時季になるとおいしい果物が所狭しとスーパー

カラチ日本人学校では、現地理解のためにカラチタイムという授業を行っています。文化や歴史、産業、現地校との交流、環境などさまざまな分野を学習しています。その中でもマンゴーの学習は、実際に育てているマンゴーを観察したり、採ったり、味わったりして多くのことを実感しながら学習しました。カラチにいるからこそできる学習をすることで、現地が好きになり、そこに住む人々のことを考えて行動する国際人となる子どもたちを育てています。

そのために、その国の言葉を使ってあいさつし、多くの人々とかかわり、その国のよさを肌で感じながら過ごしています。

(小林さんは1967年生まれ。新潟市の東山の下小学校に勤務していました。2018年度からカラチ日本人学校に勤務しています)